様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１２５７２

研究課題名（和文）地域に居住する高齢者とその家族への支援過程での困難事象と倫理的課題

研究課題名（英文）Ethical issues in the support process to community-dwelling older adults and the family

研究代表者
斉藤　恵美子（Saito, Emiko）

首都大学東京・人間健康科学研究科・教授

研究者番号：９０２５１２３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、地域に居住する高齢者とその家族への支援過程での倫理的な課題を明らかにすることとした。都内地域包括支援センター看護職を研究対象者として、無記名自記式質問紙調査を実施した。1年目の回収数は143件（回収率31.9%）であり、倫理的に迷い悩む状況を認識したことがあると回答していた割合は84%であった。その状況として、利用者と家族の意向が異なる場合、利用者と専門職の意向が異なる場合等が多く、地域包括ケアでの倫理的な課題の実態が明らかとなった。また、2年目の回収数は166件（回収率36.7%）であり、看護職は利用者の生命や安全を優先すること、多職種での支援を重要と認識していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
病院内での倫理的な課題への実態や対策に関する研究は蓄積されつつあるが、地域包括ケアを展開している地域での倫理的な課題に関する研究はほとんどない。病院内と同様に、地域でのサービス利用者の個人情報保護やインフォームド・コンセント等を含む倫理的な課題の明確化と支援方法の検討は、非常に重要である。本研究の結果は、地域包括ケアとしての支援過程での倫理的な課題を提示し、支援が困難な事象への支援を検討するための知見の一つとなり、学術的意義や社会的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to understand the ethical issues faced by nurses who provide support to older adults and their family members. We surveyed nurses at community comprehensive care centers in the Tokyo Metropolitan Area using self-administered questionnaires. A total of 143 completed questionnaires (31.9% response rate) were collected during the first year of the survey. The responses revealed the difficulties experienced by nurses providing support in a community. About 84% of the respondents were aware of ethically perplexing situations. The nurses indicated that they were often troubled when the intentions of older adults under their care differed from those of their family members. Furthermore, in the second year of the survey, 166 completed questionnaires were returned (36.7% response rate). The responses indicated that the nurses prioritized the lives and safety of those under their care. Moreover, nurses attached importance to providing multi-disciplinary support.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：地域包括ケア　高齢者　倫理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

地域に居住する高齢者とその家族の困難な事象に関する研究は蓄積されつつあるが、地域での事例に関する倫理的な課題に関する研究は数少ない。生活や健康上の課題を有する高齢者とその家族への支援については、複雑な背景や状況のために解決までの方針のみきわめが難しい事例や、解決までに相当の時間を必要とする事例が増えており、対応の考え方や方法や模索されている。保健・医療分野では、支援者側からみた困難事例等の枠組みで、認知症、精神・知的障害、虐待等の高齢者の実態等を記述した先行研究（井藤, 2014; 松下, 河口, 原田, 2015; 吉江, 高橋, 齋藤, 甲斐, 2014）はいくつか報告されているが、数は少ない。また、社会福祉分野では「処遇困難事例」「対応困難事例」の事例集や解説などは多いが、関連要因や評価などの研究報告は少ない（岩間, 2014; 岡田, 高橋, 2010）。さらに、欧米やアジアなどの海外の研究でも、支援が困難な高齢者とその家族を直接的な対象とした研究はほとんどない。日本は諸外国と比較して高齢化の速度が最も早く、平均世帯人員 2.49 人と家族の規模も縮小傾向にあり、高齢社会で生じる課題とその対策については国際的にも先導する位置にいる。

一方、地域に居住する高齢者とその家族の生活や健康の課題は、より多様化、複雑化する傾向にある。例えば、虐待や認知症などの複雑な課題を有する家族の事例や、災害時の対応、感染症発症時の対応、経済的な困窮、外国籍の高齢者、地域格差などである（近藤, 2007; 内閣府, 2015; 岡田, 高橋, 2010）このような支援が困難な状況での高齢者と家族への対応については、行政機関や関係機関などが事例集として紹介しており、必要に応じて類似した事例を探索して参考にすることは可能である。しかし、これらの事例やその支援過程での支援者・当事者の困難な状況や対応についての系統的、学術的な検討は十分に取り組まれていない。さらに、支援が困難な事例への対応や処遇の過程で、支援者・当事者が倫理的な課題に直面することも増加している。倫理的な課題については、施設職員や介護者を調査対象とした研究（横瀬, 2012; 横山, 2015）はわずかに報告されているものの、地域に居住する高齢者とその家族の困難事象を扱った研究はほとんどない。高齢者の状況や支援のあり方に関する研究過程で、高齢者支援の困難な事象やその対応、支援者・当事者の倫理的な課題の重要性は認識されつつあると考えるが、学術的な知見は十分とはいえない。

２．研究の目的

本研究の目的は、地域に居住する高齢者とその家族への支援過程での困難事象と倫理的な課題を明らかにし、具体的な支援方針や支援方法を検討することとした。具体的には以下の 2 つの目的を設定した。

(1) 高齢者とその家族への支援過程での困難な事象と倫理的な困難さの認識について明らかにする。
(2) 地域包括ケアでの看護職の倫理的な態度や行動について明らかにする。

３．研究の方法

(1) 高齢者とその家族への支援過程での困難な事象と倫理的な困難さの認識について

①研究対象

東京都福祉保健局ホームページ（2018 年 10 月現在）に公開されている地域包括支援センター449 施設の看護職を対象とした（各センター1 名に回答を依頼）。

②調査方法

無記名自記式質問紙郵送調査を実施した。

③調査項目

対象者の年代、資格、経験年数、施設の運営方式、支援過程で倫理的に迷い悩む状況の認識（以下、困難さの認識）とその状況、意思決定支援での困難な事例とその困難な状況、日常業務での倫理的な行動（以下、行動）、組織体制等とした。

④倫理的配慮

本研究は、2018 年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 18074、承認日 2018 年 11 月 26 日）。

(2) 地域包括ケアでの看護職の倫理的な態度や行動について

①研究対象

東京都福祉保健局ホームページ（2019 年 10 月現在）に公開されている地域包括支援センター452 施設の看護職を対象とした（各センター1 名に回答を依頼）。

②調査方法

無記名自記式質問紙郵送調査を実施した。

③調査項目

対象者の年代、資格、経験年数、職位、研修の参加回数、倫理的なジレンマの認識、倫理的に迷う状況や課題が生じた場合の態度や行動、看護師の倫理的行動尺度（大出, 2014; 大出, 2019）等とした。

④倫理的配慮

本研究は、2019 年度首都大学東京荒川キャンパス研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 19074、承認日 2019 年 11 月 29 日）。

４．研究成果

(1) 高齢者とその家族への支援過程での困難な事象と倫理的な困難さの認識について

調査票の回収数は 143 件（回収率 31.9%）であった。回答者の年代は、50 歳代 62 人（43.4%）、40 歳代 39 人（27.3%）、30 歳代 19 人（13.3%）であり、雇用資格は、看護師 77 人（53.8%）、保健師 31 人（21.7%）であった。困難さを感じた事例数は平均 8.4 件（年）、倫理的な判断が困難な事例数は平均 4.3 件（年）であった。支援過程で倫理的に迷い悩む状況を認識したことについては、「よくある」「時々ある」と回答した人は 120 人（83.9%）であった。倫理的に迷い悩んだ状況（複数回答）として、「利用者と家族の意向が異なり、何を尊重すべきか困った」と回答した人は 101 人（84.2%）、「利用者の意向と、専門職としての自分の判断とが異なり、何を尊重すべきか困った」と回答した人は 69 人（57.5%）、「利用者と近隣住民との意向が異なり、何を尊重すべきか困った」と回答した人は 60 人（50.0%）、「専門職としての自分の判断と、関係機関の意向とが異なり、何を尊重すべきか困った」49 人（40.8%）、「制度と他の法制度との狭間で、何を優先して判断すべきか困った」49 人（40.8%）の順であった。また、倫理的な行動として日常的に実施していることとして、回答者の 80%以上が実施していると回答したのは、「対象者の状況に合わせてわかりやすい説明をしている」「対象者の状況から自己決定が困難な場合には、複数の職員で支援方針を決めている」「サービスが公平に提供できるように考慮している」の 3 項目であった。

倫理的に迷い悩む状況を認識したことがあるという回答は 8 割であり、その内容として、利用者と家族の意向が異なる場合に悩むことが多く、地域包括ケアでの意思決定支援の困難さの実態が明らかとなった。

表. 倫理的に迷い悩んだ状況（%、複数回答）（N=120）

項　目	割合
利用者と家族の意向が異なること	84.2
利用者の意向と専門職としての自分の判断が異なること	57.5
利用者と近隣住民との意向が異なること	50.0
専門職としての自分の判断と関係機関の意向とが異なること	40.8
制度の狭間での優先度の判断	40.8
専門職としての自分の判断とセンター内の他職種の判断が異なること	20.8

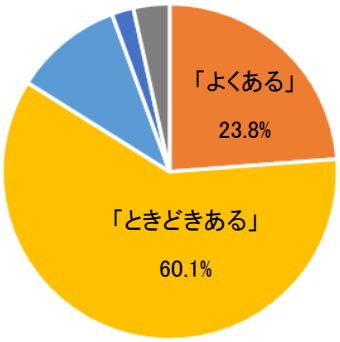

図. 倫理的な困難さの認識

（N=143）

(2) 地域包括ケアでの看護職の倫理的な態度や行動について

調査票の回収数は 166 件（回収率 36.7%）であった。調査票回収数は 166 件（回収率 36.7%）であった。回答者の年代は、50 歳代 52 人（35.5%）、40 歳代 47 人（28.3%）、30 歳代 30 人（18.1%）であり、資格（重複あり）は、看護師 157 人（94.6%）、保健師 53 人（31.9%）であった。支援家庭の中で倫理的に迷い悩む状況を認識したことについては、「よくある」「時々ある」と回答した人は 149 人（89.7%）であった。

倫理的行動尺度平均得点は 4.5 点（標準偏差 0.5）、下位尺度平均得点は、それぞれ「リスク回避」4.3 点（標準偏差 0.7）「善いケア」4.5 点（標準偏差 0.7）「公正なケア」4.7 点（標準偏差 0.6）であった。倫理的行動尺度のクロンバックのα係数は 0.79 であった。倫理的に迷う状況や課題が生じた場合の専門職の態度や行動として、「とても重要」と回答した割合は、「生命の危険をみきわめる」（86.7%）、「本人の意思決定と生命の安全の優先度を見定める」（78.3%）、「本人との関係性を構築する」（74.1%）、「センター内で情報や支援の根拠を共有し、判断する」（65.1%）、「多職種や支援者と話し合う」（62.0%）、「センター内の他の職員に相談する」（59.6%）、「客観的・多面的に考える」（57.2%）「多職種で支援する」（56.0%）、「本人の健康状態を確認する」（55.4%）、「家族との関係性を構築する」（54.2%）の順に多かった。倫理的に迷い悩む状況を認識したことがあるという回答は 9 割とほとんどの回答者が認識しており、昨年度の結果からも上昇していた。

地域包括支援センター看護職は高い倫理的行動力を有し、利用者の本人の生命や健康、安全を優先すること、本人や家族の信頼関係を構築すること、多職種での支援を重要と認識していることが明らかとなった。

＜引用文献＞

井藤佳恵. (2014). 経済的困難を抱える認知症高齢者を困難事例化させる要因: 認知症高齢者困難事例を対象としたアウトリーチ型支援事業からみえるもの. 老年精神医学雑誌, 25(6), 644-650.

岩間伸之. (2014). 支援困難事例と向き合う: 18 事例から学ぶ援助の視点と方法. 中央法規出版.

近藤克則. （2007）. 検証「健康格差社会」. 医学書院.

松下年子, 河口朝子, 原田美智. (2015). 高齢者虐待に対する地域支援の現状と困難事例をめぐる問題と課題. 高齢者虐待防止研究, 11(1), 59-84.

内閣府. (2015). 高齢社会白書（平成 27 年版）. 日経印刷.

大出順. (2014). 看護師の倫理的行動尺度の開発. 日本看護倫理学会誌, 6(1), 3-11.

大出順. (2019). 看護師の倫理的行動尺度改訂版の作成. 日本看護倫理学会誌, 11(1), 13-19.

岡田朋子, 高橋紘士. (2010). 支援困難事例の分析調査：重複する生活課題と政策とのかかわり. ミネルヴァ書房.

横瀬利枝子. (2012). 若年性認知症者の配偶者間介護における倫理的課題の考察: 介護施設入所に到るまでの現状調査の結果から. 生命倫理, 22(1), 4-13.

横山さつき. (2015). 介護施設における要介護高齢者への倫理的配慮の現状と課題: 介護職員と介護実習生に対する調査から. 老年社会科学, 36(4), 409-422.

吉江悟, 高橋都, 齋藤民, 甲斐一郎. (2014). 同居家族が問題の主体となる高齢者在宅介護の対応困難事例の現状: 長野県 A 市の行政保健師へのインタビューから. 日本公衆衛生雑誌, 51(7), 522-529.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 斉藤恵美子，表志津子，神崎由紀，村田加奈子
２．発表標題 地域に居住する高齢者とその家族への支援過程での倫理的な困難さの認識
３．学会等名 第78回日本公衆衛生学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Emiko Saito, Shizuko Omote, Yuki Kanzaki, Kanako Murata
２．発表標題 Difficulties and ethical issues in support processes among community-dwelling elderly and their families: a literature review
３．学会等名 The 22st East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	表　志津子 (Omote Shizuko) (10320904)	金沢大学・保健学系・教授 (13301)	
研究分担者	村田　加奈子 (Murata Kanako) (70381465)	昭和大学・保健医療学部・准教授 (32622)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	神崎　由紀 (Kanzaki Yuki) (80381713)	山梨大学・大学院総合研究部・准教授 (13501)	